

大学図書館における展示会活動

－ 図書館展示の分析および筑波大学附属図書館の事例報告 －

篠塚 富士男

抄録：図書館では館種を問わずいろいろな展示会が行われているが、大学図書館における展示会に関する現状分析や事例報告はあまり多くはない。そこで本稿では、我が国の大学図書館における展示会活動の現状について考察し、ついで筑波大学附属図書館の平成18年度企画展の特徴と今後の課題について報告する。

キーワード：展示会、筑波大学附属図書館、研究開発室、博物館、大学図書館、社会貢献

1. はじめに

図書館では館種を問わずいろいろな展示会が行われている。その規模や形態は様々であるが、図書館法には「図書館奉仕のため、土地の事情及び一般公衆の希望にそい、更に学校教育を援助し得るように留意」しつつ実施に努めなければならない事項の一つとして、「読書会、研究会、鑑賞会、映写会、資料展示会等を主催し、及びその奨励を行うこと」（図書館法第3条第6項）と書かれており、公共図書館では、展示会は図書館サービスの一環として位置づけられている。そしてこれは「図書館利用の一層の促進や潜在利用者の開拓を目的」とする集会活動の一つ¹⁾とされている。

一方、大学図書館においても展示会は数多く行われているが、「図書館展示に関する文献」はあまり多くなく、「事例報告が蓄積されるべき段階であろう」といわれている²⁾。そこで本稿では、大学図書館における展示会活動の現状について考察し、あわせて筑波大学附属図書館の事例報告を行いたい。

2. 大学図書館における展示会活動

2.1 博物館における展示の位置づけ

展示会・展覧会という言葉からは、図書館よりも博物館や美術館を連想する方が一般的であろう。そこで、まず博物館における展示の位置づけを簡単にみていきたい。

博物館法、図書館法のそれぞれの第2条第1項の冒頭部分（定義）を比較すると以下ようになる（表1）。

これらの文言からは博物館と図書館の類縁性が見て取れるが、その一方で、博物館法に特徴的に表れてくるキーワードとして「展示」「教育的配慮」「（館側で行う）調査研究」をあげることができる。また博物館法第4条第4項には「学芸員は、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと

関連する事業についての専門的事項をつかさどる」と規定されており、博物館では、学芸員が展示および調査研究を行うことが本務として位置づけられていることがわかる。

博物館における展示の理念については多くの議論があるが、展示活動は学芸員の研究成果の発表の場であり「学芸員は展覧会で評価される」とする観点は、展示に関する基本的な観点・理念として博物館関係者に広く共有されているものと考えられる³⁾。

こうした展示の理念を持つ博物館関係者や研究者が、大学図書館の資料や展示をどのように評価しているか、ということは興味ある問題であるが、おおむね次のような認識を持っていると思われる⁴⁾。

- ・ 図書館は利用者の求めに応じて資料を提供する機関であり、閲覧に力点がおかれている。
- ・ しかしながら、大学図書館の資料は大学の研究・教育上の必要から収蔵されているものとはいえ、特に貴重書・古典籍等は、十分に「博物

表1 博物館法と図書館法の比較

博物館法 第2条	図書館法 第2条
この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関	この法律において「図書館」とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保有して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等を目的とする施設

館資料」として系統だった調査研究、展示公開を行う対象となる。

- ・展示会（展覧会）は博物館の特権ではない。
- ・したがって、図書館資料による展示会は十分に成立する。それは一点一点の書籍を閲覧するだけでは明らかになり得ない、それぞれの書籍資料がもつ歴史や背景を、複数の書籍を併置することで読み解く作業となる。
- ・博物館と図書館、学内の関連組織との有機的な連携・機能分担を検討する必要がある。

2.2 図書館展示の目的・意義

それでは、大学図書館の展示に関する理念・目的はどのようなものであろうか。

大学図書館が主体となって展示を行う例は増えており、こうした展示を行う目的や意義について、図書館職員が言及している論考も発表されている。たとえば早稲田大学の松下真也は、1996年に発表した論考で、展覧会の目的として以下の4つの分類を提示している。

<展覧会の目的（松下真也）>

- 1) メモリアル・セレモニーとしての展覧会
(例：大学・図書館等の記念行事の一環としての展覧会)
- 2) 教育・研究目的の展覧会 (例：学会開催と連動した展覧会)
- 3) 図書館の広報・利用者教育の一環としての展覧会
- 4) エンターテインメントとしての展覧会

そして、これまでの展覧会としては1), 2)のタイプのものが多いが、「展覧会という形式でメッセージを伝える」ような3)のタイプのものや、さらには、4)の「利用者の娯楽」のための展覧会も企画されてよいのではないかと述べている⁵⁾。松下は2003年に再び展覧会について論じているが、その中では、早稲田の近年の展覧会は従来多かった1), 2)のタイプのものから少しずつ意識的に傾向を変え、おもに学部学生を対象とした、たんなる貴重資料の羅列ではない多様な展示を試みるようになった、という趣旨の記述をしている⁶⁾。これは、1), 2)のタイプの展覧会はもちろん行いながらも、この7年の間に3)や4)のタイプも重視する傾向に移行しつつあることを示している。

3)や4)のタイプも重視するこのような動きは、早稲田以外の大学の近年の図書館展示においても見

られる変化であり、松下の4つの分類はこうした動きに一定の理論的根拠を与えるものとなっている。たとえば、企画展示の目的を、展示内容と関連させて具体的に書き上げた慶應義塾大学の山田摩耶の以下のまとめも、この分類をふまえながら、実務上の経験を背景に記述されているものである⁷⁾。

<企画展示の目的（山田摩耶）>

- ①貴重書紹介
- ②テーマに関する蔵書紹介
- ③利用者教育・利用指導
- ④娯楽目的

また、東北大学の木戸浦豊和は、松下の分類を紹介しながらも、松下の分類は「大学の構成員に向けた展示会」を想定しているが、大学の外側に向けた目的＝大学図書館の地域貢献という観点で考えると、この4つの分類に「生涯学習の場としての展示会」を付け加えることができ、このような目的を想定すれば、「魅力的な展示会のために」テーマ・ストーリーの工夫や資料の見せ方の工夫、エンターテインメント性といったものを考慮する必要があると述べている⁸⁾。これは、地域貢献・生涯学習を重視する立場であるが、近年の東北大学の企画展の趣旨や、こうした同館の実践を背景に図書館展示の意義について論じた米澤誠の論考⁹⁾をもふまえたものであると考えられる。米澤の論考では、図書館展示の意義として次の3点があげられている。

<図書館展示の意義（米澤誠）>

1. 啓蒙活動としての図書館展示
2. 広報活動としての図書館展示
3. 人材育成活動としての図書館展示

ここでは、展示に関連する対象者・グループを三つに大別し、それぞれの立場からみた意義を分析しているが、これを簡略化すると次の表2のようにまとめることができよう。

このように、展示会に関わる対象者・グループをフラットなとらえ方で把握し直すことにより、展示会を観覧者に対する（広い意味での）啓蒙・公開活動としてのみ考えがちな従来の考え方・発想からの転換が示されているが、これによって、図書館展示には視点の違いによって多様な意義を見出せることが明らかになった。こうした複合的な観点は、松下が3), 4)のタイプの重視の傾向について述べて

表2 図書館展示の意義 (米澤の論考から作成)

展示のねらい	対象者・グループ	展示の意義
啓蒙活動	展示会観覧者・利用者	資料への興味・知識欲の向上・図書館資料の活用
広報活動	図書館・大学	社会へのアピール・地域貢献
人材育成活動	図書館職員	企画力・専門的知識・活性化

いることとも相通ずるものであり、近年の大学図書館を取り巻く状況に対応した分析であるといえる。

木戸浦の意見に関連して付言すると、展示会の対象者として大学の構成員を想定するか、それとも地域社会への貢献を重視するか、という点については、個々の展示会の開催趣旨(例：新入生歓迎のため)によって当然変わってくるものではあるが、一般的にいえば明確にどちらかに割り切るといっても、構成員を想定しつつも地域への公開の要素も取り入れる、という形が多いのではないと思われる。すなわち、図書館利用者という視点で考えれば、図書館の公開・サービスの範囲の拡大にしたがって大学構成員以外の利用者も展示会の観覧者として来場する、と考えるのが自然であり、特に後述する電子展示との関係を考えて対象者は拡大して考える傾向が一層強くなる。

なお、展示会を地域貢献(地域文化振興)の機会ととらえる考え方は以前から存在した¹⁰⁾。しかし、国立大学においては、展示会活動にも法人化の影響が大きく表れ、社会連携・地域貢献を重視する立場に立つ展示会¹¹⁾の開催を企画する大学が増加している。すなわち、法人化後の国立大学では、法人化前にいわれていた「大学の公開(開かれた大学)」という視点から、さらに一歩踏み込んだ「大学の社会貢献(地域社会、国際社会への貢献)」が大きな使命として求められるようになってきているが、図書館もこれに呼応する形で、社会連携・貢献事業として展示会・講演会・シンポジウムを位置づけ、積極的に推進しようとする動きが明確に表れており¹²⁾、大学図書館における展示会の理念・目的を考える上で、国立大学法人化は一つの画期となっているといえよう。

2.3 図書館展示の歴史と現状

図書館の記録・報告等を調査すると、大学図書館では古くから、またいろいろな形で展示会を開催していることがわかる。表3は、これらの展示会の中

表3 展示会開催状況

大学名	展示会開催記録	開催回数
(A群)		
京都大学	明治33(1900)年～	120回以上
早稲田大学	明治40(1907)年～	200回以上
天理大学(天理図書館)	昭和5(1930)年～	250回以上
(B群)	*近年開催分に限定	
熊本大学	昭和59(1984)年～	22回(以上)
岡山大学	平成9(1997)年～	10回(以上)
東京大学	平成6(1994)年～	12回(以上)
筑波大学	平成7(1995)年～	13回

からA群として特に展示会開催の歴史が長く回数も多い大学を、B群として展示内容・スタイルに特徴のある大学を適宜ピックアップしたものである¹³⁾。これは、それぞれの図書館等の報告によってまとめたものなので、展示会開催期間も1日だけのものから3ヶ月以上のもので様々であり、図書館以外の場所(=館外・学外)で開催したものも含まれている。また、限られた記録類を参照したものであるため、開催回数等は実際はもっと多い可能性が高く、表3であげた回数等は参考値といふべきものであるが、これらの報告が対象としている展示会は、各図書館とも図書館が開催/関与する「展示会」であり、常設展は原則として含まない、という位置づけによってのものと考えられる。そこでこれによって図書館展示の歴史と現状について考えてみたい。なお、前述の松下の4つの分類は、展示会の目的を考える上で非常に整理しやすい考え方であるので、ここでもこの分類を適用しつつ個々の事例をみていきたい(以下の1)～4)の表記は前節でみた<展覧会の目的(松下真也)>の番号に対応している)。

まずA群であるが、この3大学の記録を見ても、大学図書館における展示会には、博物館等に劣らない長い歴史や開催回数を持つものがあることがわかる。また、展示会の名称を見ていくと、戦前期(明治・大正・昭和戦前期)には1)に相当するもの(「記念」の文字が含まれるものや、皇族や教育関係者の来館に伴うものなど)が圧倒的に多い。また、この中にはもちろん2)の目的もあわせもったものも多かったであろうことは、その名称からも察することができる(例：沙翁三百年記念(大正5年4月・早稲田大学)、日本書紀編纂1200年記念(大正8年5月・京都大学)など)。一方、戦後になると(開催記録から見るかぎり)戦前よりも開催頻

度が非常に高くなっている

天理は戦前から毎年開催していたが、京都・早稲田が毎年開催となったのは1947年以降である

・学部・学会等との共催が増える

という変化が見られ、2)の教育・研究目的の展示会の開催が大幅に増加していくという全体的な傾向が見られる。また、特に近年については、前節でみたように1)、2)のタイプの展覧会はもちろん行いながらも、3)や4)のタイプも重視する傾向に移行しつつあるという変化がある。

以上のような大きな動向を踏まえつつ、多少異なる観点からB群を検討してみたい。ここに例示した4校のうち、熊本大学と岡山大学は、歴史史料として質量とも全国でも有数のコレクション(熊本:阿蘇家文書・細川家北岡文庫等、岡山:池田家文庫)を所蔵しているという特徴を生かし、これらを中心とした展示会を継続して開催している大学である。この両大学は、実質的に歴史系博物館と同様の展示会活動を展開しているところであり、その開催目的はもちろん2)に相当するが、図書館の特徴(所蔵資料の特徴)を生かしている点や、積極的に地域との連携をはかっている点からは、3)の図書館の広報という側面も担っているといえよう。

また東京大学と筑波大学は、それぞれマルチメディア展示・電子展示の名称で展示会の内容をインターネットでアクセスできるように公開している大学であり、熊本・岡山が展示内容に大きな特徴を持っているのに対し、こちらは展示会のスタイルに特徴がある大学として例示したものである。

電子展示は、京都大学¹⁴⁾をはじめ数多くの大学図書館で行っているものであるが、筑波大学では「展示そのものと印刷体の展示目録、それに電子展示の公開の三つが一体となって、特別展全体を構成するスタイル」という位置づけで「電子展示そのものが特別展を構成する柱の一つとなっているので、特別展の展示内容全体をこれによって再現するというのではなく、電子展示ならではの機能を生かして、通常の展示では提供できない新たな情報を付加して公開」することを目指す¹⁵⁾、というコンセプトによってwebページが作成されているところに特徴がある。実際の展示と電子展示との関係については、たとえば国会図書館でも「貴重書展の内容をデジタルで再現するとともに、デジタルならではの新しい形式で展示する試みを行っている」旨を表明している¹⁶⁾が、この問題に関する図書館界での議論はそれほど多くはない。しかし、特に大学図書館における展示会の問題を考える上で、電子展示の出現は大き

なエポックになる出来事であると考えられる。すなわち、電子展示を併催する場合においては(実際の展示と電子展示との違いの程度の大小にかかわらず)、展示会に実際に来場する観覧者以外の、不特定多数のビジターが電子展示を見ることを想定せざるを得ず、必然的に展示会の対象者も大学構成員以外にも拡大して考えざるを得ないであろう。これは積極的に社会連携・地域貢献としての展示会を考える立場とはやや異なるが、結果的には前述の木戸浦の指摘のように、「魅力的な展示会」というキーワードや、テーマ・ストーリー・資料の見せ方の工夫、エンターテインメント性の考慮などが必要になる。

以上、A群・B群の例によって大学図書館の展示会について歴史的な変遷をみてきたが、特に近年においては、展示会の目的・形態に大きな影響を与える「電子展示の開始」(1994年)と「国立大学法人化」(2004年)という二つの大きな出来事によって、国立大学を中心に、地域貢献の視点を持ち「たんなる貴重資料の羅列ではない多様な」「魅力的な展示会」を企画する傾向が強くなっているといえよう。

なお、近年は博物館においても、従来以上に利用者の立場に立った来館者サービスの重視・「楽しく学ぶ」ことの重要性が指摘されているが、布谷知夫の「人はなぜ博物館に行くのか」「博物館に対して世の中はどの様な期待をし、要請をしているのか」という問いかけに象徴される近年の博物館の活動の動向は、図書館展示の目的やその方法を考える上でも大いに参考になると考えられる¹⁷⁾。

3. 筑波大学附属図書館における展示会活動

3.1 これまでの開催状況

筑波大学附属図書館では、平成7(1995)年以降、毎年、特別展・企画展を開催している(表4参照)。筑波大学では、これ以前にも単発的に貴重資料の展示を行なったことはあったが、現在のような形での特別展・企画展の開催のスタートとなったのは、平成7(1995)年6月に中央図書館新館増築を記念して開催した特別展「天正少年使節と『原マルチノ演説』」であった。この特別展の開催に際し、当時の北原保雄附属図書館長は、展示会目録の「御挨拶」の中で「当館では、貴重書展示室が設けられたのを機に、今後とも図書館資料を広く公開してゆきたいと考えております」と述べている。そして、これ以後、貴重な資料の現物を広く公開することによって、資料への興味を喚起し、それが図書館資料の活用へとつながることを主要な目的として、特別展が開催されてきた。また、本学においても特に法人化後は社会貢献事業としての展示会という性格がクローズ

アップされているが、これは前述したような近年の大学図書館（展示会）の状況と同様の事情によるものである。

次に展示会の状況を具体的にみていきたい。

まず、主催者は誰か、ということであるが、これまでの13回の展示会における主催者・共催者（延べ数）の内訳は、以下のとおりである。

筑波大学	: 1
附属図書館	: 12
(研究開発室: 1)	
学内の教育・研究組織	: 10

大学が主催している展示会が1回だけあるが、これは学外（東京）で開催した展示会であり、この時は図書館の展示の他に、大学の広報関係の資料も会場に準備された。この展示会は、東京での開催ということもあり6日間で3,800人を超える入場者があったが、図書館資料を公開する機会に大学に対する関心も高めてもらおうという大学側の狙いは十分達成できたものと考えられる。また、学内の教育・研

究組織との共催・協力が8回（延べ10組織）あるが、これらはほとんどが共催組織から図書館に企画が提案されたものであり、共催組織と関連のある学会の開催と連動して出された企画もある。こうした展示会においては、おおむね、企画や図録の執筆等を教員側が行い、広報や実際の展示準備、電子展示等の実務は図書館側が行う、という形で作業を分担してきたが、このような「持ち込み企画」が多いのも、図書館で毎年特別展を実施してきた実績が学内で認められてきた結果であるといえる。大学の広報を含むこれらの学内関連組織との連携は、専門性の高い企画・展示の実現や図録の充実等の面で観覧者にとってもプラスとなる部分が多いが、図書館としても他組織との協力関係の強化や学内での存在感の向上、あるいは（その分野の専門家の視点を通じた）所蔵資料の価値の再認識、といった点でプラスになる。ただし、人材育成活動としての展示会という観点から考えると、図書館が「下請け」的な作業だけに終始することなく、企画や展示、図録の内容等にも意識して積極的に関わっていく必要があるといえる。

なお、入場者数は展示の内容や展示期間によって

表4 筑波大学附属図書館特別展等開催記録

名称	主催者	開催年月日
天正少年使節と『原マルチノの演説』	附属図書館	H7.6.1-6.8 (8) * () 内は展示日数
宇野文庫展	附属図書館 (協力: 社会科学系, 社会科学研究科)	H8.9.19-10.11 (15)
幕末・明治の生活と教育	附属図書館	H8.10.23-11.10 (19)
明治のいぶき	筑波大学	H9.8.4-8.9 (6)
近代教育学の源流	教育学系, 附属図書館共催	H10.9.7-10.16 (32)
身体と遊戯へのまなざし	体育科学系, 附属図書館共催	H11.12.6-12.17 (11)
日本美術の名品	芸術学系, 附属図書館共催	H12.5.22-6.9 (19)
日本古代の学問と萬葉集	哲学・思想学系, 文芸・言語学系, 附属図書館共催	H13.10.22-11.2 (12)
「学問の神」をささえた人びと	歴史・人類学系, 附属図書館共催	H14.12.2-12.18 (17)
筑波大学開学30周年 (創基131年) 記念附属図書館貴重図書特別展	附属図書館	H15.9.29-10.10 (12)
オリエントの歴史と文化 - 古代学の形成と展開 -	人文社会科学研究科, 附属図書館共催	H16.10.25-11.5 (12)
江戸前期の湯島聖堂 - 筑波大学資料による復元研究成果公開 -	芸術専門学群, 附属図書館共催	H17.10.8-10.30 (21)
中国三大奇書の成立と受容 - 『三国志』『水滸伝』『西遊記』はどのように読まれ、描かれたか -	附属図書館 (研究開発室) * 企画展として開催	H18.10.2-10.27 (22)

大きく変動するものではあるが、最近の2回の展示会では入場者数が1,700人を超え、その半数程度が学外者であったことから、展示会のテーマや取り上げ方によっては大学構成員以外の観覧者の割合がかなり高くなることが確認されている。

3.2 平成18年度企画展

本学の平成18年度の展示会は、特別展ではなく企画展という名称で開催した。これは、この展示会が他組織との共催ではなく、附属図書館研究開発室との連携のもとに企画・開催されたこと（すなわち「持ち込み企画」ではない図書館主体の企画であったこと）による。図書館が主体となって開催した展示会は過去にもあったが、研究開発室との連携による開催はこの企画展が初の試みであり、様々な点で今後の本学の展示会活動の展開に大きな影響を与えるものとなると考えられる。以下に、今回の企画展の概要と特徴的な試みについて、簡単に紹介したい。

3.2.1 企画展の名称と目的

この企画展は「中国三大奇書の成立と受容－『三国志』『水滸伝』『西遊記』はどのように読まれ、描かれたか－」という名称であり、開催の目的は「中国三大奇書に関する貴重な資料及び基本図書を『成立と受容』という観点でピックアップして一般に広く公開するとともに、和漢古書等の図書館資料についての大学における研究と活用のあり方を示すこと」であった。

今回、我々が規定した「中国三大奇書」¹⁸⁾は、日本でも江戸時代以降広く親しまれ、現在でも図書や雑誌だけでなく、テレビやゲーム等によってもきわめてポピュラーなものになっている。このため、企画展の会場としては本学中央図書館貴重書展示室を使用した。貴重書だけを展示したわけではなく、従来はほとんど展示の対象としていなかったマンガや映画・アニメ関係資料等についても、展示のストーリーの上での必然性があれば、展示品に加え、あるいは会期中に開催した講演会で取り上げた。その結果、「たんなる貴重資料の羅列」ではなく「教育・研究」から「エンターテインメント」までの要素をも含む、多様な見方のできる展示を行うことができたと考えている。

3.2.2 研究開発室との連携

附属図書館研究開発室¹⁹⁾は、平成17(2005)年度に開設され、いくつかのテーマに従ったサブグループによるプロジェクト形式で活動しているが、研究開発室が取り組むべき課題の一つとして「広報啓

蒙的なもの：特別展・リテラシー教育・ポータル管理など」があげられており、これを具体化した形で平成18年度のプロジェクトの一つとして「附属図書館企画展の実施」が設定された。したがって18年度の展示会は、附属図書館の企画展であると同時に、研究開発室の室員である大塚秀明助教授（本学人文社会科学研究科）のプロジェクトの一環でもある、という位置づけになっている。このため、従来の特別展よりも自由度が高く、実験的な試みも行うことが可能になった。

また、研究開発室の課題の中には、図書館資料の保存等に関する調査・研究も含まれているので、研究開発室と連携することにより、展示会を行うことの客観的な評価や、図書館展示が資料の保存・公開・活用にどのように影響するか、あるいは資料を活用した研究のサイクルの中で図書館展示がどの程度有効に機能するか²⁰⁾等の問題について、今後も継続して研究・実践する場が確立できたことになる。こうした点で、研究開発室と連携して企画展を開催できた意味は非常に大きかった。

3.2.3 企画展の実際

この企画展は、実質的に研究開発室の大塚室員および図書館職員8名（企画展ワーキンググループ）の9名（以下、この9名の体制を実施グループと呼ぶ。）で実施された。実施グループのメンバーは、もちろんそれぞれ本務を持っているので、グループ内部での連絡・議論はほとんどメーリングリストで行い、顔をあわせる形の会議は最小限にとどめた。

テーマは、大塚室員の専門との関係もあって早い段階でおおむね決定していたが、展示会は本学中央図書館で行うこと、開催期間には多くの学外者の来館が期待できる学園祭の期間を含むこと、という2点の前提条件があることをまず確認した上で、開催期間設定の事情を考慮して、観覧者としては（この分野の専門家ではない）一般の方を想定して企画することを基本方針とした。そして、従来の特別展と同じように、この企画展においても、①（貴重書展示室における）展示、②図録の作成、③電子展示を行ったほか、④講演会（2回）を実施した。また、③の具体的な内容となる企画展ホームページ（電子展示）²¹⁾のコンテンツとして、従来も実施していた「PDF版図録」の作成・提供のほかに、

- ・ 図録をベースにデジタル展示として再構成した「展示内容」
- ・ 会期中に観覧者等から寄せられた質問に答える「三大奇書Q&A」
- ・ 企画展のスタッフがお知らせしたい様々な情報

を同時進行の形で伝えていくことを目指した「企画展Blog」

の三つを新たな試みとして実施した。

これらの試みのうち、「展示内容」は当館の「電子展示ならではの機能を生かして、通常の展示では提供できない新たな情報を付加して公開」する、というコンセプトにそったもので、展示品の解説や画像の他に所蔵情報や関連リンクが付されている。また、Q&AとBlog²²⁾は、

- ・(図書館側の一方的な情報提供だけではなく) 観覧者等との相互交流をはかって、会期中でも可能な限り質問・要望等に応じていく
- ・こうした質問・要望に対する回答や、企画展に関する様々な情報を、迅速にwebで公開することによって、多くの関係者(観覧者、図書館、電子展示の観覧者等)の間で情報を共有する

という趣旨で行うことにしたものである。従来も展示会場にアンケート用紙や感想記入用のノートを置く、といった形で観覧者の声・感想を聞いたことはあったが、そうした感想等は基本的には「次回の展示会の参考にする」という形で利用しており、会期中にこうした情報を観覧者等にフィードバックする「仕掛け」は用意していなかった。しかし、これらを用意したことによって、Q&Aでは質問に答える形で図録の内容・解説等の補足を、Blogでは開催前の準備段階から企画展終了後の状況までの様々な情報を臨機応変に発信することができた。またBlogではコメントを介してリアルタイムで観覧者等の反応に触れることも可能であり、コミュニケーションの場としても有効であることが確認できた。なお、Blogへのアクセス数は、10月1日～31日の1ヶ月間で1,933件(1日平均62件)であった。

展示内容の詳細については、「PDF版図録」等を参照していただくこととしたいが、前述のように展示のストーリーの上で必然性があればマンガ・ゲーム等も展示品に加えたこと、同様の理由でインターネットで公開されている画像や他機関(博物館)所蔵資料等も許諾を得てパネルにしたこと、地域に関係した資料(『筑波水滸伝』や小川芋銭の絵画など)を積極的に展示に取り入れたことなど、これまでは行わなかったような実験的な試みも行った。幸いこれらの試みの趣旨は観覧者に理解され、好評を得ることができた²³⁾。

また、このような試みに代表されるように、図書館主体の企画ということで、たとえばポスター・図録等のデザインや電子展示の構成など、スタッフがそれぞれの創意工夫で主体的に企画展に関わり、自由に企画展を創りあげることができた。こうした作

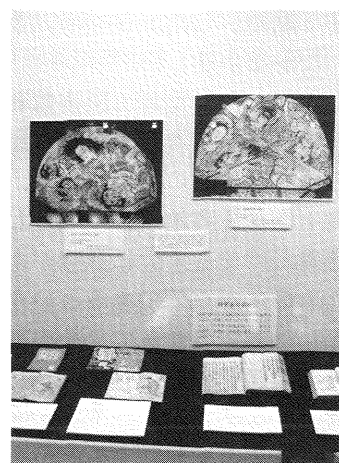


図1 弘前の「ねぶた」の画像(インターネットで公開されているもの)のパネル展示風景

業は本務を持つ実施グループのメンバーにとっては確かに時間を要するものであったが、各自の創意工夫が即座に企画に反映されるという意味でやりがいもあり、スタッフそれぞれが楽しみながら企画展に参加することができたと思う。これは実践を通じた人材育成活動という意味を持つものであり、活動できる時間が限られていることが、かえって、各人の様々なアイデア・専門知識・デザインセンス・DTPのスキル等の(潜在)能力の発揮や、実施グループの団結・一体感を持った目的遂行に有利に働いたという側面があった。

4 今後の課題：評価の問題を中心に

これまで記したように、本学の今回の企画展では様々な試みを行ったが、おおむね狙いどおりの成果をあげたといえる。これは、企画展を研究開発室のプロジェクトとして実施するという位置づけのもとに、プロジェクトリーダーが実施グループの自主性を尊重して活動を進められたことによるところが大きい。こうした経験を今後の展示会に生かしていくことは非常に重要であるが、研究開発室のプロジェクトという立場で展示会について考えると、さらに検討する必要がある課題も多い。ここでは、そうしたもののなかから「評価」に関する問題を取り上げておきたい。

4.1 問題の所在

展示会の準備には多大な時間・労力を要することが多い。しかも、多くの図書館では、その実施に際しては、専任の係が担当するというよりも、ワーキンググループ等が臨時に組織されて準備に取り組む、というようなケースが多いと思われるが、このような場合に(準備に要した時間等をも勘案した上

で) 展示会が「成功」したかどうか、という判断を行うことは、なかなか難しい。

米澤が明らかにした観覧者・図書館職員等の立場の違いによって多様な意義が見出せる展示会活動の特性を考えると、図書館の立場からは、企画力や専門的知識を向上させる実地研修の場としての人材育成活動上の意義だけでも十分に意味があり、展示会を開催すること自体が重要であるという考え方も成り立つ。しかし、観覧者あってこそその展示会であることを考えれば、観覧者を考慮に入れた何らかの評価の基準を検討する必要がある。たとえば観覧者数の多寡をもって成否を判断するという考え方もあるが、観覧者数はそれほど多くはなくても、電子展示の閲覧数が多い、観覧者に占める学外者の比率が高い等の要素があれば、一概に観覧者数だけで判断するわけにはいかない。東京大学の西野嘉章は、博物館の「展示公開自己評価」の項目として、企画意義や展示手法、図録等と並んで入館者数をあげているが、同時に博物館の評価の指標として中味も吟味せずに単純に「来館者数」をあげることの問題点を指摘している。また西野は、展示の評価には「明快な指標もなければ一定の方法も確立されていない」のが日本の現状であるが、来館者の視点を導入した評価手法（聞き取り調査等）が展示の改善に大きな力を発揮する、と述べている²⁴⁾。図書館の展示会においても、西野が指摘しているこのような来館者の視点を導入した評価手法の検討をも含め、さらに議論を重ねる必要がある。

4.2 展示会の評価の基準

展示会の評価の基準の問題については、やはり博物館界に議論の蓄積がある。この問題を議論する一つの手がかりとして、西野以外の博物館関係者の論考もみておきたい。

たとえば土浦市立博物館の木塚久仁子は、「熱心な見学者であればあるほど、解説キャプションをしっかり読むにもかかわらず、作品そのものをあまり良く見ないという現象を発見した」と、通常はあまり言及されない事実を指摘するとともに、一般の見学者とその分野の専門家では展覧会に対する評価の基準がおのずと違ってくるが「一般の見学者にとっての分かりやすさと専門家にとっての視点の鋭さが両立している展覧会が良い展覧会といえるだろう」と述べている²⁵⁾。木塚はさらに「分かりやすい展示」とは何か、過剰な親切はかえって逆効果をまねくのではないかと、といった点についても学芸員の立場から率直に意見を述べ、「作品そのものを見学者の目で確かめてもらえる」ことに留意した展覧会を開催

したいと記している。

また、東京大学の今橋映子は、「昨今の美術展およびカタログの変化」について、「評価の定まった一画家の「名作」を、年代順に並べる絵画展の古典的スタイルとは全く別種」の企画展は近年ますます盛んになっており「文化交流史、諸芸術間交渉、異文化表象、ジェンダー論などをテーマにした国内外の企画展は、新しい資料体の呈示のみならず、その企画を支える構想や、理論的背景などを含め、私たちの比較研究(Comparative Studies)とも深く連動していることは明らかです」と述べている。そして、こうした近年の展覧会そのものの評価とともに、「長年の調査や研究が投影された」「知の宝庫」と言ふべき展覧会カタログの重要性を指摘し、優れた展覧会の紹介と展覧会カタログの学術的批評を試みるコーナーを新設する必要性を説いている²⁶⁾。なお、今橋には(特別展だけでなく)平常展におけるカタログの重要性について指摘した著述もあり²⁷⁾、展覧会カタログ全般を高く評価していることがわかる。

木塚の「分かりやすさと視点の鋭さが両立している展覧会」は学芸員の立場から、今橋の「知の宝庫」というべき学術的カタログの重要性の指摘」は研究者である観覧者の立場からの記述であるが、博物館・美術館の展示会について述べているだけに、両者とも「専門性をどのように展示会活動で表現するか」という企画力(およびその結果としてのカタログに代表されるような形として残る展示会の成果物)が評価の指標となると考えられているといえよう²⁸⁾。今橋が「昨今の美術展およびカタログの変化」と表現している「テーマ・ストーリーを見せる」近年の博物館(美術館)の展示会の動きは、図書館が「魅力的な展示会」を目指す方向と基本的に同じ変化の流れにあるものと考えられ、その意味でも両氏の議論は大変興味深いものである。

4.3 検討の視点：むすびにかえて

前節で述べた「展示会の評価の基準」の問題は、結局、「大学図書館における展示会の理念・目的は何か」「その特性とはどのようなものか」という問題に関わってくる。この問題は、大局的には社会における大学の使命と不可分のものであり、展示会開催の根底にまず社会連携・地域貢献事業としての視点を持つことは必須となつてこよう。そしてこの前提の上に、個々の大学の特性・図書館の事情によって様々な目的を持ったテーマが展開していくことになる。「何が求められているか、何ができるか」を模索した結果、同一年度に3つの企画展示を実施した島根大学附属図書館の事例²⁹⁾は、先に述べた布谷

の「博物館に対して世の中はどのような期待をし、要請をしているのか」という問いかけと同じ視点からスタートした成果であるが、こうした視点を再確認し、そこから議論を進めることが重要である。前述した「図書館展示が資料の保存・公開・活用にどのように影響するか」³⁰⁾、「資料を活用した研究のサイクルの中で図書館展示がどの程度有効に機能するか」といった、まさに大学図書館における展示会の特性に直結する課題の検討も、「何が求められているか、何ができるか」という根本的な問いかけを真摯に検討してこそ、議論が深まっていくものであろう。展示会に関する研究開発室との連携は、今後も継続する予定であるが、大学図書館の特性を踏まえた展示会のモデルの検討をさらに進めていきたい。

注

- 1) 図書館用語集. 改訂版. 東京, 日本図書館協会, 1996, p.118.
- 2) 高橋菜奈子. 一橋大学附属図書館における公開展示事業と資料保存. 大学の図書館. 25巻3号, 2006, p.35-38.
- 3) 青木豊. “2 博物館展示”. 博物館展示法. 東京, 雄山閣出版, 2000, p.14-29. (新版博物館学講座, 9). (ISBN 4-639-01673-5)
加藤有次. “第6章 展示の構想試論” 博物館学序論. 東京, 雄山閣出版, 1977, p.96-106.
木塚久仁子. 年4回の展覧会活動を通して－土浦市立博物館の試み－. 博物館研究. 30巻10号, 1995, p.19-24.
- 4) 図書館資料・展示に言及のある以下の文献などを参考にした。
布谷知夫. “第3章第3節 利用者にとっての博物館資料”. 博物館の理念と運営：利用者主体の博物館学. 東京, 雄山閣, 2005. p.120-160. (ISBN 4-639-01899-1)
南本有紀. 展覧会の作り方. 大学の図書館. 24巻5号, 2005, p.74-76.
佐藤賢一. “展示の趣旨”. 知の職人たち－南葵文庫に見る江戸のモノづくり－. 東京大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2006/thema.html>>, (参照2007-3-1).
宮崎健司. 大谷大学博物館の設立と図書館. 大学図書館研究. 72号, 2004, p.50-57.
- 5) 松下眞也. 図書館と展覧会. 早稲田大学図書館紀要. 43号, 1996, p.1-46.
- 6) 松下眞也. 展覧会の企画と運営. 早稲田大学図書館紀要. 50号, 2003, p.25-70.
- 7) 山田摩耶. 日吉メディアセンター企画展示の変遷. MediaNet. No.11, 2004, p.66-69.
- 8) 木戸浦豊和. 東北地区大学図書館協議会合同研修会：東北大学附属図書館における企画展の取組み. 東北大学附属図書館報 木這子. 31巻2号, 2006, p.7-11.
- 9) 米澤誠. 広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法. 情報の科学と技術. 55巻7号, 2005, p.305-309.
- 10) たとえば次のような報告がある。
天谷真彰. 公開展示会の試み：大学図書館公開の一環として. 大学図書館研究. 27号, 1985, p.87-92.
- 11) 伊藤哲谷. 社会の共有財産としての図書館：大学図書館の社会との連携と貢献. 大学図書館研究. 76号, 2006, p.1-13.
松原敏夫. 琉球大学附属図書館における展示会活動について. 大学の図書館. 24巻5号, 2005. p.76-78. など
- 12) “法人化のなかの国立大学図書館経営：国立大学図書館協会経営問題委員会報告書”. 国立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 <http://www.soc.nii.ac.jp/janul/j/projects/mi/keiei_hokokusho.pdf>, (参照2007-3-1).
- 13) 出典は次のとおり。
京都大学：京都大学附属図書館展示会の歩み. 静脩京都大学附属図書館報. Vol.36 臨時増刊号, 1999, p.52-54.
“京都大学附属図書館展示会の歩み”. 京都大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/tenjikai/index.html>>, (参照2007-3-1).
早稲田大学：“展示会資料一覧（昭和年代以前）”. 早稲田大学図書館. (オンライン), 入手先 <http://www.wul.waseda.ac.jp/TENJI/tenji_p2-j.html>, “展示会資料一覧（1989～）”. 早稲田大学図書館. (オンライン), 入手先 <http://www.wul.waseda.ac.jp/TENJI/tenji_p1-j.html>. (参照2007-3-1).
天理大学：山中秀夫. 天理図書館展覧会一覧（稿）. ビブリア 天理図書館報. 117号, 2002, p.121-104.
熊本大学：“貴重資料”. 熊本大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/rare/>>, (参照2007-3-1).
岡山大学：青木充子. 会場から見た貴重資料展. 岡山大学附属図書館報 楳. No.34, 2002, p.9. “池田家文庫 岡山大学附属図書館コレクション”. 岡山大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<http://www.lib.okayama-u.ac.jp/ikeda/>>, (参照2007-3-1).
東京大学：“マルチメディア展示会”. 東京大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/tenjikai/index.html>>, (参照2007-3-1).
筑波大学：“電子展示”. 筑波大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/exhibition.php>>, (参照2007-3-1).
- 14) 大学図書館における本格的な電子展示は、京都大学附属図書館が1994年9月から10月にかけて「吉

- 田松陰とその同志」展を開催した時に、同時に電子版展示会として開催したのが最初であると思われる。
- 15) 篠塚富士男. 電子展示について. 天正少年使節と『原マルチノの演説』: ペッソン・コレクション. つくば, 筑波大学附属図書館, 1995. p.43.
- 16) “ギャラリー (デジタル貴重書展の部分)”. 国立国会図書館. (オンライン), 入手先 <<http://www.ndl.go.jp/jp/gallery/index.html>>, (参照2007-3-1).
- 17) 南本前掲論文4), および布谷前掲書4) の“第2章 第1節 人はなぜ博物館に行くのか”. (博物館の理念と運営: 利用者主体の博物館学. 東京, 雄山閣, 2005. p.40-46)
- 18) 中国文学史では『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』(または『紅樓夢』)を「四大奇書」と呼ぶが, 今回の企画展では成書過程の違いや日本人の受容度の違いを考えて, 『金瓶梅』を除いた三書を「中国三大奇書」と呼ぶこととした. また, 日本における受容が大きなテーマであったため, 現在の日本での一般的な呼称を考慮して『三国志』は『三国志演義』(『三国演義』)を指すものとした.
- 19) “筑波大学附属図書館研究開発室”. 筑波大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/rd.php>>, (参照2007-3-1).
- 20) たとえば, 特別展の企画・展示準備という形で, 図書館が幅広いさまざまな分野の研究者同士に新たな交流の場を提供し, 集中的に調査・研究を行った結果, 新たな発見・成果を得ることができれば, 図書館展示を「資料の公開→調査・研究→発見・成果→次の研究へ」という資料を活用した研究のサイクルの中に位置づけることもできよう. 本学の事例では, 平成12年度の特別展の準備・調査の過程で, 狩野探幽・尚信・田村直翁の新出屏風絵の「発掘」というきわめて大きな発見があったので, この年の特別展は当初の企画を変更してこの成果を取り込み「筑波大学附属図書館所蔵日本美術の名品～石山寺一切経, 狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像～」として開催された.
- 21) “筑波大学附属図書館平成18年度企画展 中国三大奇書の成立と受容”. 筑波大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/sandaikisho/>>, (参照2007-3-1).
- 22) 図書館が関係しているブログとしては, たとえば公共図書館では伊万里市民図書館 (2005年3月～)があり, 企画展Blogのように特定の活動にしばった形のものとしては, 東北大学附属図書館のブログである「大学生のための情報検索術」(2006年10月～)がある.
- “伊万里市民図書館ブログ”. 伊万里市民図書館. (オンライン), 入手先 <<http://blog.goo.ne.jp/imari-library>>, (参照2007-3-1).
- “大学生のための情報検索術”. 東北大学附属図書館. (オンライン), 入手先 <<http://dbs.library.tohoku.ac.jp/blog/djk2006/>>, (参照2007-3-1).
- また大学図書館のブログの事例としては次の報告があり, その意義についても考察されている. 山崎裕子. 図書館ブログの運営—「東大薬学図書館につき」を例として. 情報の科学と技術. 56巻11号, 2006. p.531-535.
- 23) たとえばBlogにも次のようなコメントが寄せられた.
- ・「それにしても大学図書館にマンガが展示されているのは, 衝撃でした. 一見の価値ありです。」
 - ・「私のような知識のない初心者でも分かりやすい展示内容と説明で, 無理なく見て回ることができました。」
 - ・「パラレル西遊記でも三蔵=しずかちゃんだったような. やはり日本では三蔵=女性というイメージなのでしょうか。」(これに対するスタッフからのコメントです. →「三蔵=女性というイメージは, 夏目雅子から来たものかどうなのか??このあたりの話題については, 23日の講演会で大塚先生が触れてくださると思います. お楽しみに。)
- 24) 西野嘉章. “七, 「自己評価」から「第三者評価」へ—業務実績評価”. 二十一世紀博物館: 博物資源立国へ地平を拓く. 東京, 東京大学出版会, 2000. p.53-72. (ISBN 4-13-003317-4)
- 25) 木塚前掲論文3).
- 26) 今橋映子. [展覧会カタログ評] 欄の新設にあたって. 比較文学研究. 74号, 1999. p.144-145.
- 27) 今橋映子. “コラム6 平常展への誘い”. 展覧会カタログの愉しみ. 東京, 東京大学出版会, 2003. p.226-228. (ISBN 4-13-083036-8)
- なお平常展と企画展の問題については次の論文も非常に参考になる.
- 李建志. 平常展と企画展: 韓国の二つの展覧会から. 比較文学研究. 84号, 2004. p.166-173.
- 28) なお, 西野氏は前掲書24)で, 展覧会について「大衆啓蒙型, 自己向上型, 専門研究型, 実験萌芽型」などの類型化を行い, 企画の趣旨に則って「企画性, 内容性, 学術性, 展示意匠などの諸項目について目標値の重点化」を行うことが評価の前提となる旨を述べている.
- 29) “絵図の世界—出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図—”. 島根大学附属図書館報 沁雲. 6号, 2006. p.8. (オンライン), 入手先 <<http://lisa.shimane-u.ac.jp/0/shoun/vol006.pdf>>, (参照2007-3-1).
- 30) たとえば, 高橋前掲論文2)によれば, 一橋大学での展示事業は「資料保存に配慮した展示方法」を心がけているということであるが, 各大学の特徴を踏まえたこうした実践は, 極めて有意義である.

<2007.3.14 受理 しのづか ふじお 筑波大学附属図書館情報サービス課課長補佐>

SHINOZUKA, Fujio

Exhibition activities in Japanese university libraries

Abstract: Despite the fact that most libraries host a variety of exhibitions, there has been little research done to analyze exhibitions held by university libraries. This paper seeks to examine the current state of exhibitions in Japanese university libraries and then report on the features of the 2006 exhibitions held at Tsukuba University Library as well as future challenges.

Keywords: exhibitions / Tsukuba University Library / Research and Development Office, / museums / university libraries / social contributions